

# 凧の世界史 20 中国の凧【2】 木鳶から紙鳶そして風箏へ

## ●はじめに

前号中国の凧①では、凧の起源の諸説について書きましたが、その後、会報第 58 号に堀切真人さんが紹介された『飛行の古代史』ベルトルト・ラウファー（杉本剛訳・博品社刊・1994 年）にも凧の起源について書かれていることがわかったので、その内容について触れて置きます。

凧の起源に関しては、『飛行の古代史』では、「1 章 古代中国—飛翔譚」と「2 章 航空機の先駆—凧」にまたがって書かれています。堀切さんが会報第 58 号に紹介しているのは 2 章だけです。

ラウファーが木製の鳶については、自動の機械仕掛けの装置で、凧とは区別しているからです（参考資料 1）。

中国の凧①で、私は『飛行の古代史』の原著者であるベルトルト・ラウファーについては、クライヴ・ハートの著書『Kites: An Historical Survey』（参考資料 2）の記述の紹介で説明していますが、ラウファーの原著に記述されている内容のすべてをカバーできていないので、あらためて、ここに「1 章 古代中国—飛翔譚」のうち、木製の鳶に関わる部分を以下に紹介します。

## ●木製の鳶に関するラウファーの記述

『飛行の古代史』のページ 30～31 には、次のように木製の鳶について書いています。

《公輸子—山東省の魯州に住んでいたのもたの名を魯班つまり（魯の機械技師）ともいう—は孔子の同時代人で、頭の切れる機械技師だった。前五世紀の思想家の名のもとに編まれた書「墨翟」（49 章）によれば、彼は竹と木を用いて鵲（かささぎ）の彫像を作り、できあがったこの人工鳥を飛ばしたところ、それはようやく 3 日後に地上に降りてきたという。公輸子は、手に入れたいと思っていた都市の様子を探るため、木鳶（木製の鳶）に自ら乗って空へ昇ったという別な伝承もある。

木鳶は墨翟の作または公輸子と墨翟の共作で、3 日間休むことなく飛ぶことができたという話を伝える中国人たちもいる。紀元前 3 世紀の思想家・韓非子は、墨翟は 3 年かけて木鳶を作ったが、たった一日飛んだだけで墜落したと述べている。これらの様々な物語の中で、〈3 日〉と〈3 年〉とが混同されているのは明らかだし、またこの人工物の構造やからくりがどのようなだったか、なんら明確な概念が伝わらない。中国人研究者の中には、この木鳶を後世のおもちゃの紙製の始祖・先駆とみなす者もいるが、その見解は間違っていると思われる。それはどちらかということ、自動の機

械仕掛けの装置で、ある程度まで空を上昇する能力をもったアルキュタスの鳩に似た類のものだったと思われる。

韓非子や列子は空飛ぶ鳶を作ったのは墨翟だと主張しているが、そうではないことは確実である。まず第一に墨翟は倫理・社会に関わる思想家であって、手仕事に携わることはなかった。第二に、墨翟自身は木鳶という発明を無益で役に立たないおもちゃとして非難して当然と考えていたのだ。

公輸子は、ほかにも幾つかの発明—2種類の製粉機と〈雲梯<sup>うんてい</sup>〉として知られる都市包囲戦用の長梯子—で有名である。彼はまた、バネ仕掛けで馬車を牽ける木製の馬を作ったとも伝えられている。また母親のために自動の木製御者を作ったという別な言い伝えもある。現在では公輸子は、大工の守護聖人としてあがめられている。》

以上に紹介したラウファーの記述を要約すると、次のようになります。

①木鳶（木製の鳶）を作った人の名として、公輸子の他、墨翟や公輸子と墨翟の共作という諸説があるが、木鳶は公輸子またの名、魯班が作ったものとする。

②木鳶は凧の先駆ではなく、ある程度まで空を上昇する能力をもった自動の機械仕掛けの装置であった。

③木鳶を3年掛けて作ったとか3日間落ちずに飛んだという伝承があるが、〈3日〉と〈3年〉とが混同されている。

これらのラウファーの意見のうち、①については、納得でき、②については自動の機械仕掛けの装置と想定する根拠の説明が不十分で、後の凧の先駆としては、木製の鳥凧の方がより理解しやすいと思われます。その点で、ラウファーの著書『The Prehistory of Aviation』が刊行された1928年よりも後に研究し、著作を出版しているジョセフ・ニーダムが「凧の先駆」と考えた方に軍配があげられると思います。③については、長時間を掛けて作成し、良く飛んだということを強調するために伝えられたものと思います。

なお、ラウファーの原著の『The Prehistory of Aviation』はインターネット上でも読むことができ、公輸子、魯班、墨翟のそれぞれの英字名は、Kung-shu Tse、Lu Pan、Mo Tiとなっていました(参考資料3)。これらの英語名は、私が前号の会報で記述した、他の英語資料での表記と少し違いはありますが、中国名の発音をどう捕らえたかによる程度のものです。

#### ●凧の初期の利用目的は軍事目的

凧が初めて揚げられた頃の凧は木製で鳥の形状を模したものでした。そしてその利用は専ら軍事目的でした。たとえば、A K A (American Kitefliers Association)のホームページ(参考資料4)には、次のように書かれています。

《凧揚げに関する書面による最初の記述は、韓信が周囲を壁で囲まれた街

の上に木製の鳶を揚げて、軍隊が壁の下に到達するために掘らなければならないトンネルの距離を計算し、敵軍を驚かせ、韓信軍は勝利した快挙に関するものです。》

また、哈魁明と哈亦琦の共著の『中国の鳶』（参考資料5）のページ12には次のように書かれています。

《楚と漢とが相争っていた頃（紀元前206～紀元前202年）韓信が木製鳶を放ち、その糸の長さをもとに未央宮までの距離を測ってトンネルを掘り、ついには未央宮までの距離を測ってトンネルを掘り、ついには未央宮へ攻め入ったとの話があります。さらに韓信が垓下に項羽の楚軍を取り囲んだ折（紀元前202年）楚軍の戦意を打ち砕くために夜昼をいとわずに木製鳶を作り、張良を乗せ、楚軍の上空に放って楚歌を高らかに唱わせたともいわれます。これによって楚軍は故郷への思いを触発され、志気はちりぢりとなり、ついには項羽の敗北を早めたとのことです。》

この資料では、韓信が木製鳶を作り、張良をそれに乗せ、楚軍の上空で楚の歌を唄わせて、楚軍の志気をくじいたという四面楚歌のような話にまで発展させています。

ラウファーの『飛行の古代史』（参考資料1）の「2章 航空機の先駆一鳶」のページ24には、上と同じ韓信の事例を次のように記述しています。

《前章（1章）ですでに指摘したように、公輸子の木の鳥は鳶ではなかった。この装置に関する最も早い記載は、紀元前196年に没した韓信の一生にかすかに見出される。彼は、漢王朝初代の皇帝として王座についた劉隠を助けた3英雄の一人として知られている。韓信は未央宮までトンネルを掘ろうと決心して、宮殿までの距離を測るために紙鳶を飛ばしたといわれている。（中略）韓信が紙鳶を作ったという話が疑わしいのは、紙が発明されたのが、その300年後だという理由からである。中国の作家たちは〈紙鳶〉と称するのを常とするが、すいた紙は蔡倫によって105年によく発明されたのだ。それ以来、紙が実用に供され、鳶が紙で作られるようになり、今では他の材料は使われない。だからといって、すいた紙が発明される前に鳶が作られることはなかったという主張は筋が通っていない。枠組みは、絹、麻やその他の軽い織物で被われていたことだろう。》

これら3つの参考資料は、いずれも韓信が未央宮を攻めたときに宮殿までの距離を測るために鳶を揚げたという話しに関するものだが、次のような点で検討が必要です。

①韓信が未央宮を攻めたとき鳶を揚げたという話は本当か。AKAのホームページには「鳶揚げに関する書面による最初の記述」とあるが、どのような書面に記述されたものか

② 揚げられた凧の種類は、木鳶（木製の鳥凧）だったのか、それとも紙鳶（紙製の凧）だったのか

③ 韓信が木製鳶を作り、張良をそれに乗せ、楚軍の上空で楚の歌を唄わせたという話しの確かさは？

① については、ラウファー原著の『飛行の古代史』ページ 48 にも、  
「これ（韓信が凧を使って、敵までの距離を求めたこと）は同時代の記録にはなく、比較的新しい情報源にあるのみ」と書かれており、韓信が凧を使って、敵までの距離を求めたことは、後世に作られた伝説と考えられます。

そもそも、韓信がいた頃は、紙はまだ利用されていなくて、記録用の媒体としては、木簡、竹簡または絹布が利用されていた時代です。また、韓信は、中国秦末から前漢初期にかけての武将で劉邦の元で数々の戦いに勝利し、劉邦の覇権を決定付け、張良・蕭何と共に漢の 3 傑の一人ですが、その戦いの生涯を描いた資料にも、凧を揚げて、敵との距離を測った話は出てきません。やはり、この話は伝説の域を出ないものだと思います。なお、前記の『飛行の古代史』ページ 31 の公輸子による竹と木を用いて作られた鵲（かささぎ）の話が書かれたという前 5 世紀の思想家の名のもとに編まれた書「墨翟」について、インターネットで調べたら、次のようなことでした（参考資料 6）。

「墨翟は、当初は儒学を学ぶも、儒学の仁の思想を差別的な愛であるとして満足しなかった。そこで、無差別的な愛を説く独自の思想を切り拓き、一つの学派を築くまでに至った。

『墨子』は、墨翟の思想を記した書物。名目上の著者は墨翟だが、実際は墨翟本人よりも弟子たちによって記され、学派全体の思想変遷や派閥対立を伴いながら、漸増的に作成された。全 53 篇が現存しているが、本来はもっとあり、一部の篇が散逸した姿と推定される。21 世紀の中国においても、墨子は中国科学技術史の源流として尊重されている。」と書かれており、墨翟自身が書いたものでなく、弟子筋にあたる後代の人達により書かれた可能性があります。

ラウファーは中国科学技術史をよく調べており、その上での「韓信が凧を使って敵までの距離を求めたとは後世に作られた伝説である」というラウファーの意見を尊重したい。

② については、前記のように、ラウファーは「韓信が紙鳶を作ったという話が疑わしいのは、紙が発明されたのがその 300 年後だという理由からである。中国の作家たちは〈紙鳶〉と称するのを常とするが、すいた紙は蔡倫によって 105 年になってようやく発明されたのだ。」

と考証しています。①で述べたように、韓信の話が後世に作られた伝説であれば、その時代には中国では、凧を紙鳶といていたので、韓信が紙鳶を揚げたことにしていたものと思います。時代考証から韓信の時代にはまだ紙が凧の材料として使われていないと考えた人は韓信の伝説に木鳶を使ったということだと思えます。

③については、前号の会報に凧の世界史 19 中国の凧①でも述べたように魯班が木製の凧に乗って、敵軍の上から偵察したということを伝説もしくは虚構としましたが、韓信が木鳶を作り、それに張良を乗せて、楚軍の上空で楚の歌を唄わせて、楚軍の志気をくじいたという四面楚歌のような話にまで発展させているのも時代を代えて四面楚歌の故事の舞台となった垓下の戦いの場を利用したものでこれも伝説もしくは虚構でしょう。

『飛行の古代史』ページ 49 には凧が軍事目的に利用された事例が、後世に作られた伝説とされた韓信の事例以外にも次のように 2 つ紹介されています。

「549 年、侯景は、のちに梁の武帝となる簡文がたてこもる台城（南京）の町を包囲した。外界との通信ができないので、簡文は紙鳶に通信文をつけて飛ばし、友軍に危急存亡の窮地を知らせようとした。」

「781 年、忠実な将軍・張奭が、世を治めている徳氏に反逆した田悦の手から臨洛の町を守ったとき、張は守備隊が飢餓の危機に瀕している窮状を馬燧に知らせるため、凧を放った。」

最初の事例で簡文が揚げた「紙鳶」はラウファーの原文では「ペーパー・カイト」となっており、紙製の凧として中国名で「紙鳶」が使用されていたことがわかります。後の事例では、ラウファーの原文では単に「カイト」であり、特に英語では材料までは触れていないが中国語で紙鳶が中国での凧の一般名になっていたこと示しているためでしょう（参考資料 3）。

#### ● 凧の使用材料の変化がもたらした凧の利用目的の変化

唐王朝（618～907 年）まで、凧の骨組みには竹が使用され、面材には、紙が発明され、安価に利用されるようになるまでは、紙よりも早く実用化されていた絹が使用されていました。蔡倫によって 105 年に発明または改良された紙（従来、紙は蔡倫が発明したとされてきたが、蔡倫は従来からあった紙の改良者であるとする説が現在はより一般的）は樹皮やアサのぼろから作られたものだったが、唐時代（8 世紀）には樹皮を主原料とした紙や、竹や藁の繊維を原料として混ぜた紙も作られるようになり、紙がより安く生産されるようになると、凧が庶民のものになって行きます。絹は非常に美しいが、より高価であり、伝統的な美術工芸品として使用されています。紙は安価で実用的であり、凧に使用される紙の種類は非常に薄く、繊維質であるため、重量が軽減されても、強度が確保されます。そして、

凧に糸や竹笛をつけて音が鳴るようにした凧があらわれ、凧のことを「風箏」と呼ぶようになりました。

『飛行の古代史』ページ 45 はその経緯を次のように記述しています。

《音を奏でる凧は、凧作りの名人で皇室ご用達の凧職人・李鄴<sup>りぎょう</sup>によって 10 世紀に初めて発明された。彼は糸の付いた普通の紙鳶を作り、その頭部に竹笛を固定した。この凧を飛ばすと、風が笛の穴に当たり、古くは十二弦の、今日では十三弦の琴に似た音を出すのであった。こうして凧を指す新しい名前《風箏》—今日では何の区別もなくあらゆる凧に用いられている—が流行するようになった。》

『中国の凧』ページ 12 でも次のように紹介しています（参考資料 5）。

《五代（907～960 年）の頃、李鄴<sup>りぎょう</sup>は宮中で糊張りの紙鳶を作りましたが、この紙鳶の頭に竹笛が取り付けられていたため、風が吹くと笛が鳴り響き、それがまるで箏の音色のようであったと記されています。風箏という名称はここに由来しています。

さて、当時の風箏は絹製のものが多く、華麗に彩色され、装備の部品も精巧なものでした。けれども北宋（960～1127 年）以降、凧も紙製のものが増え、次第に民間でも流行するようになりました。そして、南宋（1127～1279 年）に至り、遊びとしての人気が高まると、凧揚げで名をはせる芸人まで現れるほどになりました。ここに至り、凧の製作と揚法とが社会的に見て専門的な技術となったと言えるでしょう。以来、凧は人気の底辺を広げ、凧揚げは年中行事の一部になってゆきます。》

明（1368～1644 年）および清（1644～1911 年）王朝時代に凧作りと凧揚げは、芸術の域になりました。民間の伝統的な工芸品になった中国の凧は、現代でも最上の凧は、竹の骨組みに絹を張り、その上に手描きの絵や文字などがあしらわれています。形状や絵柄は多様で、燕や鳶などの鳥類、蝶やトンボなどの昆虫類、金魚やナマズなどの魚類、その他の獣、そして龍などの伝説上の生き物、天女、文字、壺、幾何学模様など様々な形状で作られており、色や大きさもいろいろです。

河南省開封市・北京市・天津市・山東省濰坊市・江蘇省南通市・広東省陽江市が中国の伝統的な凧の 6 大名産地といわれています。

近年には、フレーム材に竹に代わって、カーボン・ロッドを用いたり、面材もリップストップ・ナイロンが使われるようになり、それらの材料を使用した凧でも中国は世界の工場として生産され、輸出されています。

## ● 凧の世界への伝播

中国で発明された凧は、次第に世界に伝搬されていきましたが、そのルートについて、クライブ・ハートはその著書（参考資料 2）で次のように記述しています。

《中国で凧が発明されるとすぐに隣国の日本や韓国に伝わり、さらに、南や西に向かってビルマ（現ミャンマー）、マレー半島、インドネシアおよびインドに伝播していき、いつかははっきりしないが、少なくとも2000年前には、マレー周辺には伝わっていました。ポリネシアへの移民の初期には凧はまだ知られていなかったが、東はイースター島までのポリネシアの文化に早い段階で知られるようになった。アラブには、約1500年前にアジア南部を経て伝わった。ヨーロッパへは貿易に伴っての伝播ルートの他に、点線のルートでも伝わった可能性があります》（図1）。



図1：西暦1600年以前の凧の伝播ルート

- A. 韓国および日本へ
- B. マレー諸島へ
- C. オセアニアの各地へ(東はイースター島まで)
- D. ミャンマー、インドを通過してアラブと北アフリカへ
- E. 海洋貿易ルートでヨーロッパへ
- F. 蒙古の侵略に伴う伝播の可能性
- G. アラブ人と交流のあるヨーロッパ人からの伝播

クライブ・ハートの記述のように中国での凧の発明後すぐに日本に伝わったかどうかは別にして、遅くも平安時代中期までには、伝わっていたと思われており、平安時代中期に作られた辞書『和名類聚抄』に凧に関する記述が紙老鳶（しろうし）、中国名「紙鳶」として登場します（図2）。

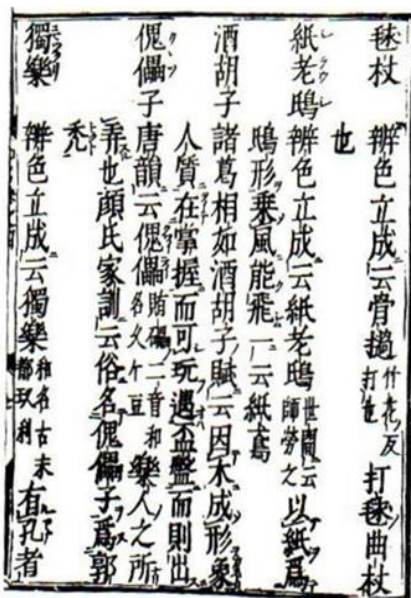


図2



図3



凧が描かれている絵が日本で記載されている百科事典は、江戸時代中期に編纂された『<sup>わかんさんさいずえ</sup>和漢三才図会』で（図3）、和名は紙鷗（いかのぼり）で紙老鷗（しろうし）と以前の名前も出ており、中国名についても風箏とともに以前の紙鳶も出ています。なお、風箏は今でも中国で凧を示す一般的な名前になっています。

#### ● 濰坊国際凧揚げ大会と濰坊凧博物館

山東省濰坊市は、凧と特別な関係があります。濰坊市の手工業は、約217年前の清王朝から中国最大の凧生産地と流通センターとして凧作りの技術はよく保存されています。職人とその製品は、1980年代から観光名所として宣伝されており、毎年4月20日から25日まで濰坊国際凧揚げ大会を開催し、数千人の凧愛好家が世界中の隅々から濰坊に来て、毎年この時期に凧揚げ大会に参加します。1988年、世界各国の凧組織が濰坊を「世界凧の都」に推薦し、その翌年の1989年に開催された第六回国際凧揚げ大会では、中国、米国、日本、英国、イタリア、その他12か国の代表者によって国際凧連合会が設立され、本部を濰坊としました。

また、濰坊市には凧の歴史に特化した博物館「濰坊凧博物館」もあります。濰坊凧博物館の敷地面積は13,000平方メートル、建築面積が8,100平方メートルで、建物の造型は濰坊の龍頭ムカデ凧の特徴を選び取ったような形の屋根になっています。前号で紹介した魯班の像も濰坊凧博物館の前に設置されています（写真1）。



写真1：濰坊凧博物館外觀図



博物館には、中国の古代から現代までの凧と世界中の凧を展示する 12 の展示室があり、2,000 の凧を展示されています。たとえば、展示室には次のように展示されています（写真 2～5）。



写真 2: 濰坊凧博物館の展示  
ムカデ凧



写真 3: 濰坊凧博物館の展示  
竜頭ムカデ凧と金魚凧



写真 4: 濰坊凧博物館展示室の展示 1



写真 5: 濰坊凧博物館展示室の展示 2

第 1 展示室は凧の歴史と発展を紹介し、凧についてのさまざまな学校や様式、競技規則、国際凧連合会について説明しています。また、国内外の各種の独特で素晴らしい凧を展示しています。

第 2 展示室は濰坊の凧の展示室で竜頭ムカデ連凧をはじめとした独特のスタイルを持っている濰坊の凧を展示しています。

第 3 展示室は世界の凧の展示室で、凧の歴史を紹介し、北朝鮮、韓国、日本、マレーシア、ヨーロッパおよびアメリカの凧を展示しています。

第 4 展示室は中国の凧の展示室で、主に北京、天津、濰坊、南通の凧作りの伝統の紹介と凧を展示しています。

以上

## ■ 参考資料

1. 『飛行の古代史』ベルトルト・ラウファー著 杉本剛訳 (1994年・博品社)
2. 『Kites :An Historical Survey』 Clive Hart (1982年・Paul P. Appel社)
3. Berthold Laufer Wikipedia,  
[https://en.wikipedia.org/wiki/Berthold\\_Laufer](https://en.wikipedia.org/wiki/Berthold_Laufer)  
List of Works : 1928: The Prehistory of Aviation
4. History of Kites | American Kitefliers Association (AKA)  
<http://kite.org/education/history-of-kites/>
5. 『中国の凧』哈魁明 哈亦琦著 (1985年・グラフィック社)
6. 墨子 ウイキペディア  
<https://ja.wikipedia.org/wiki/墨子>
7. 『世界の凧』デイヴィッド・ペラム著 広井力訳 (1978年・美術出版社)
8. 凧 ウイキペディア  
<https://ja.wikipedia.org/wiki/凧>
9. Chinese Kites - History and Culture  
<https://www.chinahighlights.com/travelguide/culture/kites.htm>
10. 中国の凧の歴史  
<http://chugokugo-script.net/chugoku-bunka/tako.html>
11. The Weifang Kite Museum in the World's Kite Capital  
<https://www.chinahighlights.com/weifang/attraction/weifang-world-kite-museum.htm>
12. 2020年 風箏博物館へ行く前に！  
[https://www.tripadvisor.jp/Attraction\\_Review-g635524-d1814267-Reviews-Kite\\_Museum-Weifang\\_Shandong.html](https://www.tripadvisor.jp/Attraction_Review-g635524-d1814267-Reviews-Kite_Museum-Weifang_Shandong.html)
13. 濰坊凧博物館--中国山東網  
<http://jp.sdchina.com/show/2297513.html>